

27 妊娠末期における若年初産婦の妊娠の受容と 関連要因との検討

沖縄県立看護大学 ○玉 城 清 子
賀 数 いづみ
加 藤 尚 美

I 諸言

我が国の思春期・青年期年代の性交経験率は年々増加傾向にあり、それに伴い若年者の妊娠中絶率や出産率が上昇している。若年者の妊娠出産は教育の機会喪失、経済的困窮、妊娠の受容困難等のためハイリスクといわれている。本研究は、若年妊婦の妊娠受容状況とそれに関連する因子を明らかにすることを目的とする。

II 方法

若年妊婦を対象とするプロスペクティブ スタディを行っているが、今回はその一部を報告する。対象者は妊娠確定時 20 歳未満で、妊娠 30 週以降の初産婦である。妊娠 30 週以降としたのは、この時期には出産を身近に感じるようになり¹⁾、妊娠を受容してないと出産後の母子関係に悪影響を及ぼすと考えられるためである。研究趣旨の説明後、同意の得られた 41 人の初産婦へ自記式調査用紙に記入を依頼した。調査期間は平成 14 年 12 月から平成 15 年 7 月までであった。質問紙は①基本的属性、②本人及び家族の妊娠受容から構成されている。データ分析には SPSS を使用し、有意差検定は Mann-Whitney の U 又は Kruskal-Wallis の検定を用いた。

III 結果

属性は表 1 の通りである。対象者及びその夫の平均年齢はそれぞれ 18.6 歳 (SD0.8)、21.5 歳 (SD4.5) であった。家族形態は夫婦で実家に同居が最も多く、学歴は妊婦及び夫 (彼氏) とも中卒が多かった。有職は妊婦 12.2%、夫 (彼氏) 85.4% であった。若年夫婦の年収は「100 万円以上～200 万円未満」が最も多く、家庭経済状況を「やや厳しい」と認識しているのが多かった。家計は、夫、実父、実母の順に支えていた。婚姻状況では既婚 68.3%、未婚 31.7% で、既婚者の 100% が妊娠後の結婚で、また未婚者の 91% は結婚の予定があった。既婚者への結婚相手として望んだ人かとの質問に対し、52% は「非常に希望」、24% は「希望」、6% 「やや希望」となっており、多くが結婚相手として希望した人であった。

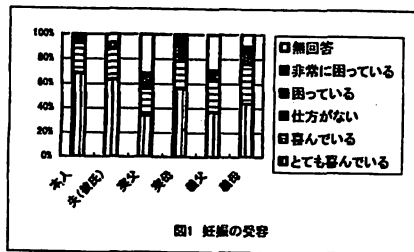
本人及び家族の妊娠の受容状況は図 1 の通りである。妊娠を「とても嬉しい」や「嬉しい」と肯定的に受容していたのは、本人や夫 (彼氏) ではそれぞれ 92.7%、87.8% で高率であった。実・義父母のうち肯定的受容者が多かったのは実母で、最も少なかったのは実父であった。

本人の妊娠の受容と夫や両親の妊娠受容には正の相関があった(表2)。

本人の妊娠の受容と他変数との関係では、妊娠までの交際期間、結婚相手としての希望度、妊娠希望の有無が関連があった(表3)。妊娠を肯定的に受け止めていたのは、交際期間が長い方(P<0.01)、結婚相手として希望度が高い方(P<0.05)、妊娠を希望した人(P<0.001)であった。

平均年齢	本人18.6歳(SD0.8)、夫(彼氏)21.5歳(SD4.5)
家族形態	未婚で実家に同居22%、核家族26.8%、夫婦で実家に同居51.2%
本人の学歴	中卒65.9%、高卒22.0%、専門学校卒2.4%、無回答9.8%
パートナーの学歴	中卒43.9%、高卒39.0%、専門学校卒7.3%、無回答9.8%
本人の職業	常勤2.4%、アルバイト9.8%、無80.5%、無回答7.3%
パートナーの職業	常勤65.9%、アルバイト19.5%、無7.3%、無回答7.3%
年収	100万円未満7.3%、100万円以上～200万円未満39.0%、200万円以上～300万円未満17.1%、無回答36.6%
家庭経済状況	やや余裕あり2.4%、普通24.4%、やや厳しい53.7%、厳しい17.1%、無回答2.4%
家計を支える人*	夫41.5%、本人1.9%、実父24.5%、実母18.9%、義父1.9%、義母11.3%
婚姻状況	既婚68.3%、未婚31.7%
知り合ってから妊娠までの期間	3か月未満12.2%、3～6か月22%、半年～1年19.5%、1年以上～2年未満24.4%、2年以上19.5%、無回答2.4%
結婚相手としての希望度**	非常に希望48.1%、希望22.2%、やや希望14.8%、あまり希望せず3.7%、希望せず3.7%、無回答7.4%

*重複回答:母数53人 **母数は既婚者27人



	本人との相関係数	P
パートナー	0.487	0.002 **
実父	0.454	0.015 *
実母	0.523	0.001 **
義父	0.483	0.008 **
義母	0.525	0.001 **

表3 本人の妊娠の受容と他変数との関係

	本人の妊娠の受容
	P値
年齢(18歳以下、19歳以上)	0.379
学歴(中卒、高卒、専門学校)	0.683
家族形態(未婚で実家、夫婦、夫婦で実家)	0.159
家庭経済状況(やや余裕有、普通、やや厳しい)	0.597
パートナーの職業(常勤、バイト、無)	0.658
妊娠までの期間(3か月未満、3～6か月、半年～1年、1～2年、2年以上)	0.008 **
結婚の有無	0.186
結婚相手としての希望度(非常に思った、普通、やや、あまり、思わなかった)	0.011 *
妊娠希望の有無	0.001 ***

Mann-WhitneyU、又はKruskal Wallisの検定 *<0.05 **<0.01 ***<

IV 考察

廣井等²⁾の若年妊婦への調査で「妊娠といわれたときの気持ち」として「うれしかった」が半数を占めていた。妊娠週数や質問項目が異なるため単純には比較できないが、我々の妊娠30週以降の若年初産婦は、大部分が妊娠を肯定的に受容していた。これは妊娠中絶は21週まででしかできないため、妊娠継続の意志決定はそれまでになされており、妊娠に肯定的な者が妊娠を継続しているためと推測される。妊娠の受容と関連がある変数は妊娠までの交際期間、結婚相手としての希望、妊娠希望の有無で、交際期間が長く、結婚相手としての希望度が高い者、妊娠を希望していた者の方が妊娠を肯定的に受容していた。また本人・夫・両親の妊娠受容には正の相関があることなどから、家族の実際的及び精神的サポート、好きな人と結婚子どもを生みたいという気持ちが妊娠の受容に肯定的に働くと推察される。

- 1) 松本清一(編): 系統看護学講座、母性看護学各論2、医学書院、2000。
- 2) 廣井正彦等: 生殖・内分泌委員会報告、日産婦誌、49(9)、P763-778、1997。